

◆ 第5回 発情行動を正しく観察していますか？

前回(9月3週号参照)は、黄体ホルモン値から発情と判断した牛の30%強が誤りである事を説明致しました。そこで、今回はどうすれば良いかを考えてみましょう。

アメリカでの成績を、下表1-2に示しました。「どのような事で、発情と判断しておりますか？」と尋ね、「乗駕行動を中心として」と答えた方の群では55%が妊娠したのに対し、「乗駕行動以外の発情徴候で判断した」(水様性の粘液排出、外陰部の腫脹、粘膜の色調など)と答えた例では低い値を示しております。

表1-2 乗駕行動の見落としはありませんか？

区 分	乳汁中黄体 ホルモン値	観察頭数	受胎率
乗駕行動による判断	低値	163	55%
牛群管理者の誤った判断	低値	197	37%

(Smith,1982)

生殖器に異状の認められない例を用いた実験の成績について説明致します。

人工授精を行ない、一定の時間間隔で卵管や子宮から受精卵あるいは胚を回収した結果、排卵後3～6日目(受精卵移植の時、胚を回収する時期)は、ほぼ100%の例から受精卵が確認でき、10～15日目(次の発情期の前で、黄体が退行する時期)になると86～90%と低下。予定発情期(実験開始=人工授精・排卵後20～25日目)では70～75%の例からしか胚が見つかっておりません。

この成績は、努力すれば1回の人工授精で70%までは妊娠させることができる事を意味しております(生産者の方と人工授精師の共同作業が必要です)。

牛が示す「アイ・ラブ・ユー(私は、管理者に感謝します)」は、どのような行動(乗駕行動と歩数の増加)でしょうか？また、人工授精師のカルテに多くの情報が書き込まれている事も妊娠率を向上させる一因です(生年月日、これまでの分娩状況や回数、今回の分娩月や状況(介助の程度、子牛の性、胎盤所見、分娩後の経過など)、発情の開始や経過、疾病の処置、乳量、給与飼料の質や量などなど)。

牛のメッセージを正しく聴きましょう！